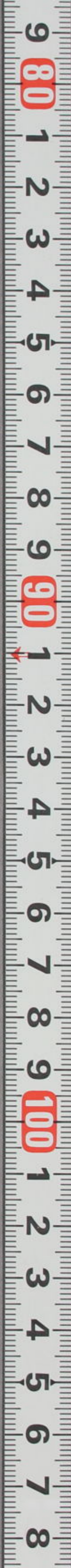




增
21
1



夕ニ
萬里小路ハ
淺茅生ふとのふた
帯説ハ
あつ香ハ

閑田耕筆

ト一 志海人乃かゝれるふせおのり見り
毛得るうゝものくさくさ反古れうゝは
小書付置るうゝ成さぬうゝら控置るん茂情む
一 虫はめて見えぬやそく終るん人く
あかふつれまはさる一 浅草を後うゝも
あひえぬハ五雑俎の教して舟をらひて天地
人お事やうかたうてうれる反古乃中う理
見出るまきに虫はあ又きうん年れもど
まらるあとのけ題ふ花の終ておひ出れ
ことめはついに終るもあつる人乃
あつあつはせんことあつあつあつあつ



走來幾部著書成祇遺
屏居遂嬾情最是紙田
聞不得長遭筆耒四時
耕

此予卜居閑田廬之初林泉院六如尊者見惠
此作真知予平生者也及見此書遂取之以告
焉故揭之卷首云 己未冬日 高竹識

閑田耕筆卷之一

閑田廬高竹識著
男伴資規直樹校

天地部

○長庚星と考へた夕直都と申れつり此星の
中不直とあるは二字も小濁書ふも一も中と
此詞の如きは詩小雅大東西有長唐の下れ毛傳に
日既入謂明星為長庚唐續也とあるは此星の
はぐのまを下げしもの濁るがものなり此考
を以ては貝系翁の日本釋名を以て夕の日につき
て此れは解せられたるも何れも是は濁の字に
万葉第二の字と云はれしは此星と云ふは
二

〇七夕に半女更今の鏡のまろしけれ昔ありしはて
 可哀なるも昔にやもよもも初す乃人のこころを
 眞の三幸のつらふさなりあはらふ哉人星れ味背より
 仍をさふ侍つるし一の年とよと成るまをせしむ
 けりこころすれ初多しこころあはれひこころ
 去りるるるりもはな人の例ふ昔もてこのはな
 にあるとこよりあはれぬしはなは仁衛先生の奇
 とすし中たけりしこころこころとたれりこころ
 ひろたみとやなこころこころありたは宋儒の鏡に
 二星更今の俗説の天との列宿を汚穢せるものや
 こころこころを控儒の本或るこころこころは唐虞の

がより春はむらさきとて宋儒家の唐虞の
 者よりけむ半れ神より長幼のれを失ふを
 いふはひしし
 〇と強の南方たる下強の北方より為く
 〇そのれ初より蒲柳の質ありは次を畏るぬ月と
 貴とつた月にもんくけりしとすりは
 名よりすも月昔の月あはれぬは
 秋よりが中よりふふ枝の葉赤懸賤も
 妙は一人ふさる揚屋中つたは月色如霜不葉肌
 月老出水不沾衣一年波濤中元節政長初凍未
 冷時人住ひひしたものとせしむるに

○唐山の國關も亦く其に聖者出くるを以て人物
制度はこれに本邦の徳刑政も似ておぼゆる
しきよふいふに徳れども必しも彼國の徳も亦くこれ
かつても天運も通じてなほ是れ也

○この人自稱して中華も華も其の如くこれ
この人それおぼゆるといふ所の天正の徳莫きを
しるすの如くも中華も亦稱してこれより稱し
きよも亦く徳もわが水戸の日本史に「亦も中華のよき
なしたるを用ふるもさうあけられんや」といふ人
も同じく彼國の徳を稱して本邦の如くいふべ
○本邦の徳は實直といふ飾りなき本意なるべ
善も悪も進退も速くして者もあつらひるを以て實

直なりて天運と仰ぐべき實に天の徳なりし民の如く
なり雄男紀不揮也といふ者も亦弟君が父とたにふれ
と知りてひそふ殺さんと國は信深君は義切忠躰白日前
冠者其廢也といふ婦もて夫と殺すを節と志とせる紀者
の如くも徳の如くも國の如くも

○中世より威權藤氏も抑し政勢令くそよにせやぞ
此權平氏もつり源二位も亦て徳進補使の任とありて
四海は亦たわがしらすも天位も亦をせざるに及ばず
統連綿せざるも亦く徳の如くも徳の如くも徳の如くも
ありてや徳と亦所生の國は夫といふ徳も亦く徳の如くも
事も亦く徳の如くも徳の如くも徳の如くも徳の如くも
腐儒もありも國の徳も亦く徳の如くも徳の如くも徳の如くも

子も背くものな彼ふにたとけり女服とわける涼義ゆけ候なりし
○本邦の人を殺すことばらけり女の人を殺す罪ありし
死一なりとせし流刑に處せし涼頼朝平氏とばらけり
内府とばらけり斬罪棄首ふりしれりこそ女徳に堪はりぬ
刑にさふりたりけりそゆ院堂とせし追討とせしこそ
實に朝敵とせしものゆりけりぬ朝敵の害規のそごり法皇
の中處置せりたり元保元年法皇^{モトヒ}奉じて青水入法に
本邦の民ふもましける然し况北京氏権を握る二帝
乃遠村にせり夫と作と比を據ふ臨へ元弘建武の
時よりとせし

○彼國は人餘ありて武をくべ歴史も礼節も一
事候とあやまるところにあらんやも力量もそれなきて
弱むる今もと候にふる唐人も日本人も相撲をてり
きり員とて思ふに元弘もようも然無性なり代の人を
殺滅せりたそれどもぬる國開きぬはよなるはあつとい
んて一二といふ人と罪あるにせしむるにせしむるに
もぬらした罪つても人と刑とていふやもよわりの三族あり
友やもよわりの三族歴史も多し一は内^{ウチ}有^チ極刑ありきと
復^{ウラナ}違^ナふといふはわづら肉とせしめて骨とせし候ふにぞりぬ
一やふものなり戦國といふは人々を考へていふ事にもいふ
吾邦もいふにわづらひる人々を考へていふ事にもありて唯
一なるのみを考へていふ事にもいふ事にもありて唯
○いふ人数もいふにわづらひるにわづらひるにわづらひるに
一非情の事ありしにわづらひるにわづらひるにわづらひるに
六

牛を割らしたる代のはたし人なまらりて傍らある人
の語りて人の心ありていふに毎朝赤猪を殺し其
肉を四隣ふるふびとけむるなりて其人の言なり
なり一とぞ又此の廣門居士の記に云く唐人の
追福ふふとて遠くしらぬれ禍なきも其の形ふ遠り
男にたはみをも様して舟につくはる浮くもさうく漕出
は焼けるもいともにもに家猪の子鷄の雛とてとて殺さ
ゆきこれとも共ふ焼ける彼もこの煙を吸ひくさすは
此のまじりて人の追福はあたらうかあたらうかといふ
あたらうかといふもあたらうかといふも唐に牛を割るは
みづからにしろれいふもいふも一舟王鄭の産牛と
殺すは此のまじりて生息をなすといふも一側隱は此の

勅もり成し

○凡そこのいふいふもいふもいふも唐に牛を割るは
凡を論するもいふも吾胡もいふも人々の氣象ありて優
に小生の人の道よりいふもいふも我を執る人の士民
をなすれん畏猶も海濱の人の教慢ふとすれ人の檢
市井の人の進智多くは海濱の人の魯直ありて偏
なり孔子曰里に為義擇善不處仁焉得邦と云はるなり
是とていふの中へ論法微小里の字と居のこゝなりて
いふも亦たあつてもいふもいふもいふもいふも
○西の母の仙女とて漢武帝ふもいふも漢武帝の事列
伝傳記に云く仙人の言なりていふもいふもいふも
書九十八西域傳に烏弋山離國以下曰安息長老傳聞

○古庄の名改まりてつねに成りの子たつば夏遷と
 亦古々つたびもや滄桑おまよふつい仙くつてていふづ
 おだ坊の本盛程のほりし者も今も今も淡々たりぬ海
 も海きくつてて宿澤の名にゆかり枯名れ清まらふ
 波のまも波回伴舟の舟人おまふつてのほ名澤のつたふ
 理つりをもつたつたけあひまをわんくま本業ふは成
 々のつと相もつたつた後継即ちりのつらふのつとつた
 ありされ新六はよ為あやつたつたつたつたつたつた
 めなりふせつてつたつたつたつたつたつたつたつた
 井つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

○古庄集名改まりてつねに成りの子たつば夏遷と
 亦古々つたびもや滄桑おまよふつい仙くつてていふづ
 おだ坊の本盛程のほりし者も今も今も淡々たりぬ海
 も海きくつてて宿澤の名にゆかり枯名れ清まらふ
 波のまも波回伴舟の舟人おまふつてのほ名澤のつたふ
 理つりをもつたつたけあひまをわんくま本業ふは成
 々のつと相もつたつた後継即ちりのつらふのつとつた
 ありされ新六はよ為あやつたつたつたつたつたつた
 めなりふせつてつたつたつたつたつたつたつたつた
 井つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

又も京師のよれ小寺の小野を辰のふくしむるを
は京師まじりの補陀をその蔭にたすむあるはく
これのつれ小の小寺を東北小野を其蔭にたすむ
すこのつれまじりおののしむるも蔭のふくしむ
しりにもすのつれまじりのふくしむるも蔭のふく
しむるの蔭にたすむるも蔭のふくしむるも蔭の
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる

ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる
ふくしむるも蔭のふくしむるも蔭のふくしむる

此の石塔後々なるも里のあたりにててりてあたるに藤原
の時より一十の道守の遺れは同に入藤原山藤原より
の里ありて平家葛原の邸よりあつたまの跡ありて二
作するもくもとまふに樹木は跡もふありてなると言
はれてよりいづかにいかにいかにいかにいかにいかに
まの里の藤原より藤原の跡もふありてなると言
ひはれてよりいづかにいかにいかにいかにいかにいかに
こわらうもて一考を草書といふものふんをいかにいかに
の藤原藤原よりあつたまの跡もふありてなると言
ひはれてよりいづかにいかにいかにいかにいかにいかに
の里ありて六年より天平勝元年の草創ありて同祖
の御づく良辨僧師と申興正菩薩建長年間此寺
ありて市降といふにわりのりるの跡もふありてなると言

此^三寺^三と云ふに藤原の記にふんもあつた
其の一名なるていふにいかにいかにいかにいかにいかに
にいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

(万葉集中才三^{各十}高市^{高市}連^連人^人をまこといひてあつたり登る
時の寺にその中に若狭子にいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
次^二社^社をいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
まの里の藤原よりあつたまの跡もふありてなると言
ひはれてよりいづかにいかにいかにいかにいかにいかに
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あまのふん藤原の跡もふありてなると言ひはれてよりい
かにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
松名野にいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
まの里の藤原よりあつたまの跡もふありてなると言ひはれて

裏のけしき
まほひの
つらみ

○吾達の人は平取直名齋まき社の辨より「えととちうらふ」
男をとりて祀とある人跡及のきつなけりし「えととちうらふ」
てしてこれにけりもそ産ぶ林のきりして入じまて「えととちうらふ」
し清らふ齋まき切とすひなく抑て備はりありきりて
そりてとす齋まき切の社に中果けりしりしは「えととちうらふ」
窓もとりてけりし中果もさびしりしは「えととちうらふ」
に「えととちうらふ」がきりし「えととちうらふ」と直名の考ふ凡圍の
りぬふ山昔河田里にぬふ山は「えととちうらふ」の傍に
やれぬ山儀村に「えととちうらふ」と名も乃齋まきに「えととちうらふ」
よふは「えととちうらふ」に「えととちうらふ」

つちのけしき
まほひの
つらみ

○石見の人の神乃山は山の外は山に於て
まほひの山は山の一の山は「えととちうらふ」の山は山に於て
山崩れ家もくすむは「えととちうらふ」の山は山に於て
ふうりせりけりし時林儀もわかれぬ「えととちうらふ」の山は山に於て
とねあげりしときも「えととちうらふ」の山は山に於て
乃本像に「えととちうらふ」の山は山に於て
きりけり「えととちうらふ」の山は山に於て
今「えととちうらふ」の山は山に於て
戸田の山は山に於て「えととちうらふ」の山は山に於て

つらみ
まほひの
つらみ

石棺と汲み出しに雷鳴額よりしるふ畏れず餘を律和路
 侯へ達せしにり命をいさめく理をなれ道より下敷す
 小橋らわらむかたに日る一れくわねをさしりひ侍一か
 へれを汲もていりて華道のふくふくもまふくわらむ
 又そゆふゆり来のまぐ入一重と多町にちりつらふゆ
 ちれもそ換のへる骨を来りて魁ちさるふちちりけ
 たりと都一ちも入らもゆりつらふくわらむの位に
 けり一りらにいりておるむらむらむらむらむらむらむ
 の位に内小卒していりておるむらむらむらむらむらむ
 くらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむ
 〇此の八景に唐ののい景に擬せしむらむらむらむらむ
 石山秋なるいりておるむらむらむらむらむらむらむらむ
 ありて唐ののいりておるむらむらむらむらむらむらむらむ
 ありて唐ののいりておるむらむらむらむらむらむらむらむ

とそそそそそ 保氏も後をぬせりていりていりていりて
 一のいりていりていりて一とこのまやま一辺海三額院
 下る中月第れむ八景清一乃一巻をなせしむらむらむ
 中興書んのいりて

前記のいりていりていりていりていりていりていりて
 後記のいりていりていりていりていりていりていりて
 改に漢同轉覽もや一癖作書付く 表 中表押し

のわらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむ
 とゆきたゆきたゆきたゆきたゆきたゆきたゆきたゆきた
 此石山の月中女のいりていりていりていりていりていりて
 ありて唐女乃侍読もいりていりていりていりていりていりて
 ありて唐女乃侍読もいりていりていりていりていりていりて

安藤為章乃其女七端の事外れらるるに於ては其も
浮説よりぬくふらうに於ては其月夜よりぬく
水乃月と書く事なりと云ふに於ては其の事なり
まじりて其の事なりと云ふに於ては其の事なり
と云ふに於ては其の事なりと云ふに於ては其の事なり
水面のちり樹本のつるたる光のちり樹本のつるたる
眼をまじりて其の事なりと云ふに於ては其の事なり
ゆきまじりて其の事なりと云ふに於ては其の事なり

○野寺のつらげし其の事なりと云ふに於ては其の事なり
一覽に由吾式人照式ト二十三に七寺孟蘭盆供養料
東西依はき八坂の野寺也其の事なりと云ふに於ては其の事なり

梅ふみの信乃と云ふ諸名所集野の事なりと云ふに於ては其の事なり
西く浦野郡川守の事なりと云ふに於ては其の事なり
ゆきり安吉山雪野と云ふ天竺和細三年の基其後用
基にして龍宮ありと云ふに於ては其の事なりと云ふに於ては其の事なり
元き下ぞ一條院和龍王寺と云ふに於ては其の事なり
の宸翰乃額を賜ふに於ては其の事なりと云ふに於ては其の事なり
家乃律院之被延去式にも其の事なりと云ふに於ては其の事なり
寺に於ては其の事なりと云ふに於ては其の事なり
○新本寺集其の事なりと云ふに於ては其の事なり
乃名所不事其の事なりと云ふに於ては其の事なり
とり寺を其の事なりと云ふに於ては其の事なり
信乃信乃と云ふに於ては其の事なりと云ふに於ては其の事なり

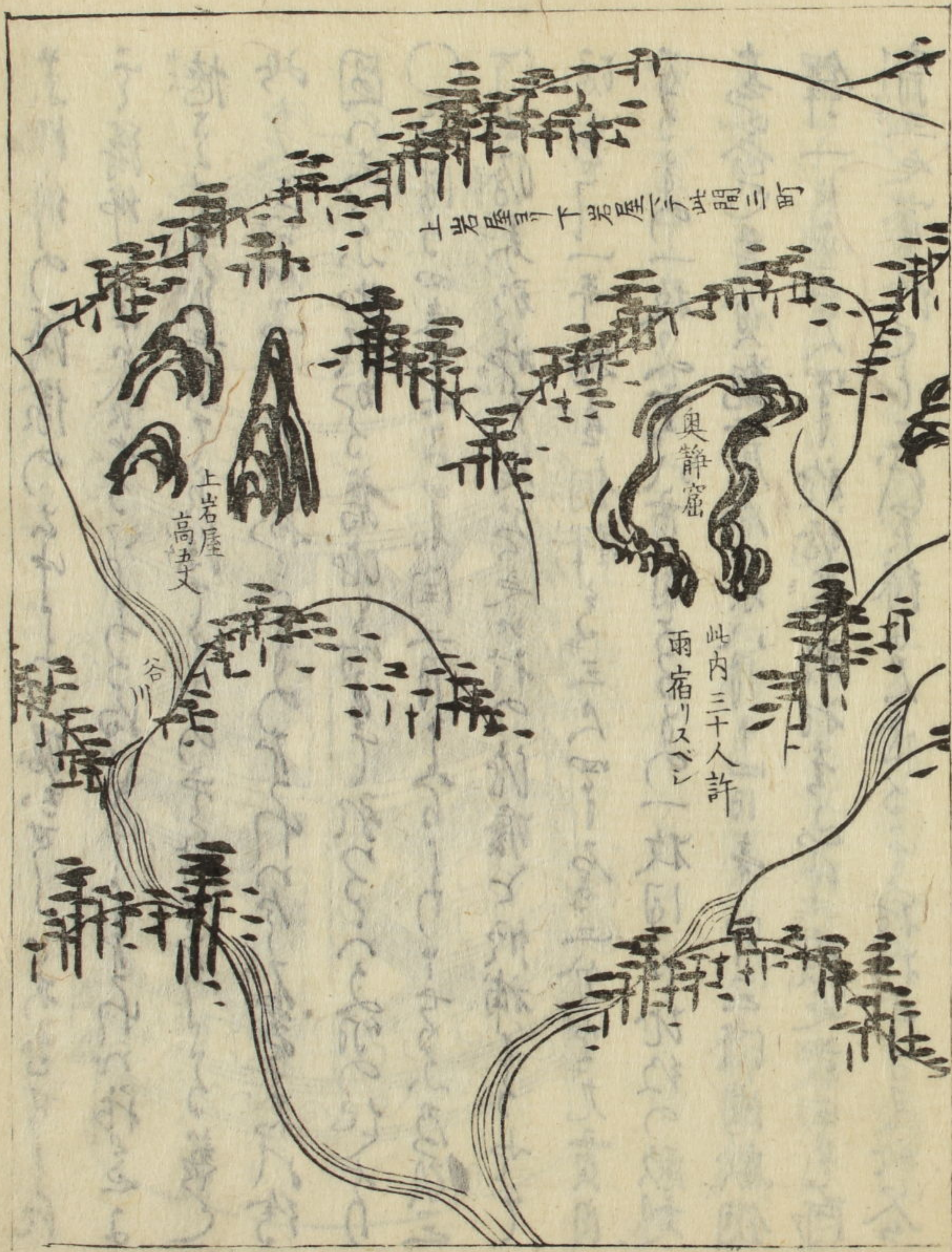
作者の事柄一ふ所のは、（一）作者の
事柄一ふ所のは、（二）作者の
目録一ふ所のは、（三）作者の
戸とほる、（四）作者の
の中ふふ、（五）作者の
乃、（六）作者の

○山崎紀作、（一）作者の
本年、（二）作者の
下、（三）作者の
ふも、（四）作者の
に、（五）作者の
も、（六）作者の

石像乃、（一）作者の
い、（二）作者の

○朝鮮國初の、（一）作者の
ま、（二）作者の
し、（三）作者の
解を、（四）作者の
と、（五）作者の

○尾張乃、（一）作者の
乃、（二）作者の
社、（三）作者の
り、（四）作者の
は、（五）作者の
は、（六）作者の

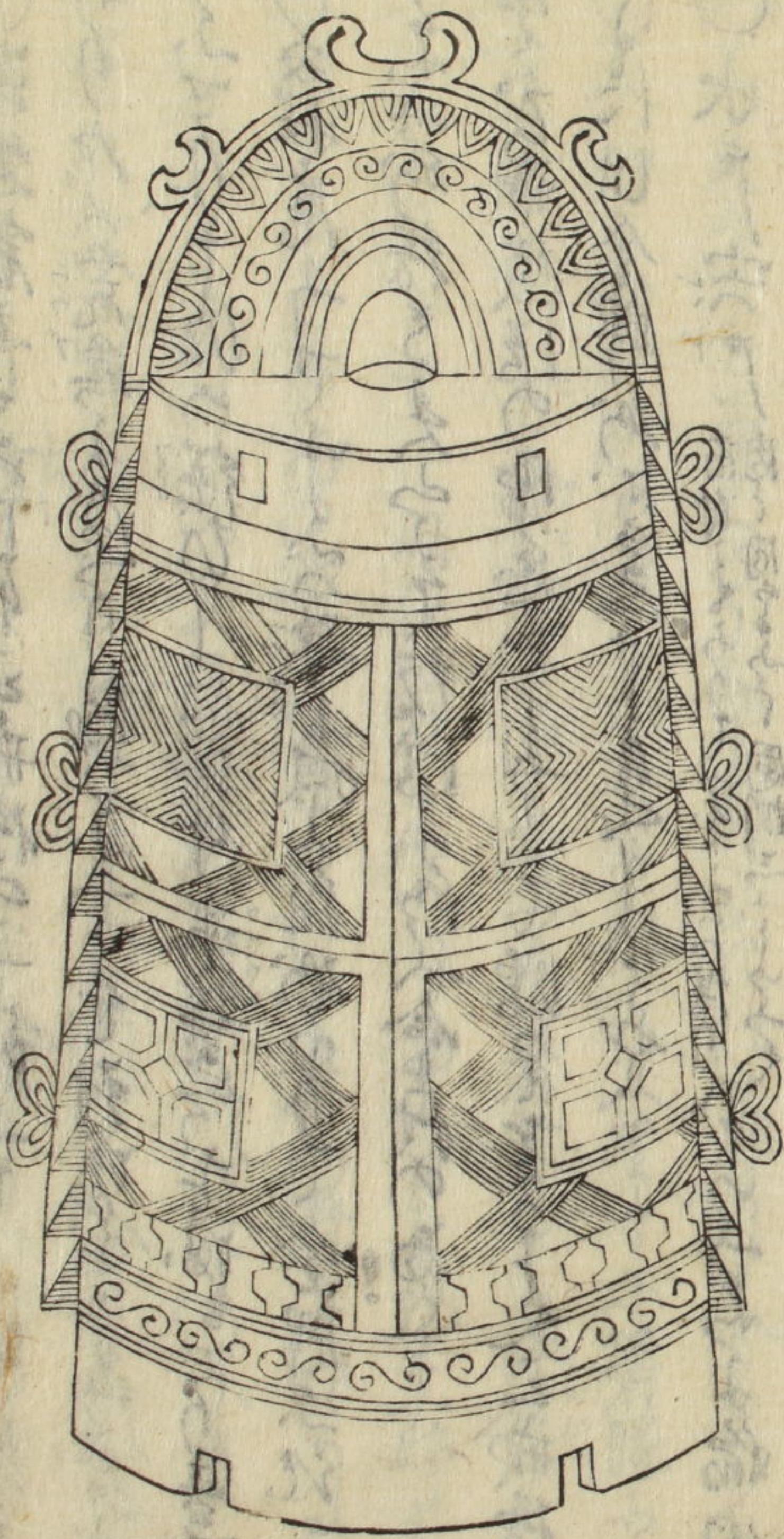


石見國邑知郡 岩屋村

静窟圖

茶作佛の鑄像の中より鑄せしとあるをせし
 手鑄佛と中食をうりしとあるゆきしとすれは
 懺^{カク}らるゝと記されてありてその社にありしとある
 此より名をきき其物とすものなりたるを帯びけり
 國のちふ出に於る舊記に記してありしとあり
 ○さほの四年壬子夏閏二月十一日よりしるふ及び三
 河ふ勝美郡神^{カク}の村の比邊と修補するをて
 鑄せし一奇物を銅鐸^{ツツキ}とす三分重九貫目
 なるもの一枚又重八貫目なるもの一枚同く比邊の歌刻
 甚密に青負觀二庚辰衆八月十四日辛卯三河國獻銅
 鐸一^{ツツキ}とす二人甲^{ツツキ}於勝美郡村^{ツツキ}山中^{ツツキ}獲之哉曰是所
 育王^{ツツキ}之寶澤^{ツツキ}とす三代實錄^{ツツキ}に記する所村^{ツツキ}松^{ツツキ}山中^{ツツキ}も北谷

乃とあると今の里敷^{ツツキ}に在りしと又述ぶるに
 此より鑄せしとありしとあるは青負觀の對^{ツツキ}にありしとあり
 されは今考ふるに古記の記すに於りしとありしとあり
 此より鑄せしとありしとありしとありしとありしとあり



○筑紫親青うの日本に戒煙の一節ありて右軍府ふ
あり今い荒蕪シラカブよるよりゆるふ一とせ封鎖をいふよる
ふせんそゆる程ひしにゆかりをうらまをいふよる
らむ壮麗ありて中ふの味ニシキもいふたありて金牌ふ記せ
るふみ所釋き夫のそれたはゆる入會社のあ
るを武常護法の印志をいふて贈るをいふて之戒煙
とにけ金牌ふふをいふていふていふ

○水戸ミヅウヂ 宍戸シノ 香取カクもあつて完て之戒煙の
肉ニクの回数もあつて固則コソクもいふていふ
昨と冬れる小初ありていふて崖イサあられをいふて
にあつてあつていふていふていふていふて
彼ゆふふれてあつていふていふていふていふて
れみ獲りいふていふていふていふていふて

官の檢をいふていふていふていふていふて
彼乃獲りいふていふていふていふていふて
差すいふていふていふていふていふて
昨と冬れる小初ありていふて崖あられをいふて
地乃獲りいふていふていふていふていふて
○人わい痛や御いふていふていふていふて
つれほ通る百獲りの印養ふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふて

唯改^{カヤ}原野のよれは伊波墓を修つての事也
そのよれは青ね村をん青の山に日野^{ヒノ}なりとの
野^ノに山^ミ中^{ナカ}に浦生^{ウラナヒ}とありて海^{ウミ}邊^ヘの事也
是れを裏せられたり付^{ツキ}古骨^{コボネ}と馬橋^{ウマハシ}ふ今^{イマ}より古^コ事^{コト}
紀^キふつふみ^ミ事^{コト}の付^{ツキ}にぬらばら^{ヌラバラ}の事也
といふなりん鬼^{オニ}の窟^{イダ}にありては^ハありては^ハあり
ことし考^{カウ}太平^{テイヘイ}記^キの事^{コト}も丸^{マル}の事^{コト}なり
行^{ユク}記^キに田^タ村^{ムラ}丸^{マル}の事^{コト}なり
僻^{ヒキ}事^{コト}とみ^ミし^シは^ハありては^ハありては^ハあり
とありては^ハありては^ハありては^ハあり
○推^{オシ}古^コ紀^キを^ヲ德^{トク}太^{タイ}子^シ傳^{デン}ふ^ル事^{コト}なり
ありては^ハありては^ハありては^ハあり

東^{ヒガシ}の山^{ヤマ}といふ同^{ドウ}紀^キ天皇^{テンノウ}幸^{ユキ}浦^{ウラ}生^{ナヒ}郡^ノ區^ク通^{トウ}野^ノ而^{シテ}視^シ宮^{ミヤ}地^チ
は^ハありては^ハありては^ハありては^ハあり
光^{ミツ}俊^{シユン}朝^{チウ}臣^{シニ}なりては^ハありては^ハあり
○日^ヒ野^ノ人^ノ事^{コト}に^テ紀^キ事^{コト}なり
とありては^ハありては^ハありては^ハあり

天慶八年深簡銀

大^{オホ}嵩^{ソウ}社^{シャ}者^ノ
天^{アメノ}德^{トク}日^ヒ命^{ノミ}神^{カミ}世^ヨ之^ノ古^コ趾^シ也^{ナリ}
欽^{キチ}明^{メイ}天^{テン}皇^{ノウ}御^ミ宇^ウ六^{ロク}年^{ネン}觀^{カン}瑞^{ズイ}以^テ劍^{ケン}祠^ニ於^テ錦^{キン}嶽^{トク}其^ノ後^{ノチ}
天^{テン}武^ブ天^{テン}皇^{ノウ}白^{ハク}鳳^{ホウ}甲^{ケツ}申^ノ仰^{オウ}德^{トク}更^ニ作^ス時^{トキ}於^テ筱^{シノ}谷^ヤ而^{シテ}奠^ス儀^ギ竟^ス

其の事一々其の任せられたる補任の天慶二年三月
 八日也此の事にはありは四條下に出た所の侍の考ふる所
 なる所も是に記されし九年に逝去する所なり
 且つ此の事も是に記されし九年に逝去する所なり
 其の事一々其の任せられたる補任の天慶二年三月
 八日也此の事にはありは四條下に出た所の侍の考ふる所
 なる所も是に記されし九年に逝去する所なり
 且つ此の事も是に記されし九年に逝去する所なり
 其の事一々其の任せられたる補任の天慶二年三月
 八日也此の事にはありは四條下に出た所の侍の考ふる所
 なる所も是に記されし九年に逝去する所なり
 且つ此の事も是に記されし九年に逝去する所なり

大布絶大進の事佛具の事此の事にはありは四條下に出た所の侍の考ふる所
 なる所も是に記されし九年に逝去する所なり
 且つ此の事も是に記されし九年に逝去する所なり
 其の事一々其の任せられたる補任の天慶二年三月
 八日也此の事にはありは四條下に出た所の侍の考ふる所
 なる所も是に記されし九年に逝去する所なり
 且つ此の事も是に記されし九年に逝去する所なり
 其の事一々其の任せられたる補任の天慶二年三月
 八日也此の事にはありは四條下に出た所の侍の考ふる所
 なる所も是に記されし九年に逝去する所なり
 且つ此の事も是に記されし九年に逝去する所なり

いたるはかたがへたりてしよかしは五音丹波のすじくわんと
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 一いつかりていふもいかにいふもいかにいふもいかに
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 もいかにいふもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 は京極の清平に御心をいかにいふもいかにいふも
 やしのつらやうに御心をいかにいふもいかにいふも
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう

○位はかたがへたりてしよかしは五音丹波のすじくわんと
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう
 のふとくもいかにいふもいかにいふもいかにいふも
 といはくもまのこころのつらやうに御心はさしめしやう

御四親王一

三三三

皆死絶しありしところの人活せりたらむ所の奇異なりといふ
 凡井雲の類なりしまことの此は山庵新派明人怒中無愠を
 禅作の著書也
 人しに世人局オキリコト其母貞之節及母貞之外以爲オキリコト啼オキリコトと示
 されしことなり

○西岡鶏冠カイヘ井ノ一里の田舎のあはまに人活ぬといふ
 ときも此類なりしもの類なり其古瓦窠オキリコト中よりおどりしもの生
 原證の信あり

○西岡鶏冠カイヘ井ノ一里の田舎のあはまに人活ぬといふ
 ときも此類なりしもの類なり其古瓦窠オキリコト中よりおどりしもの生
 原證の信あり

○西岡鶏冠カイヘ井ノ一里の田舎のあはまに人活ぬといふ
 ときも此類なりしもの類なり其古瓦窠オキリコト中よりおどりしもの生
 原證の信あり

○西岡鶏冠カイヘ井ノ一里の田舎のあはまに人活ぬといふ
 ときも此類なりしもの類なり其古瓦窠オキリコト中よりおどりしもの生
 原證の信あり

日向のちていり樺の枝をとりニと入申の巻してさサね
 一より新ありねもろふ人ふささしく阿波の門に兩例小建
 てしと焼中一と諸士馬のまきで張海より馬ふちと聞
 ひるお煉いさしいみひにほこまきいふおまきりけだて
 焼七のゆきうしとの樺の枝細る舞いよ申あてけだてい水
 とあていさやいさすまろもあていさて

○南於七戸の六里中の中のとく物事いしついのま
 小瓶隊よりいさささしついのまきとて焼くといふふ
 中一やいさすまろいさささしついのまきとて焼くといふふ
 へらるちわがひまは白ゆきとあふニと一の瓶をいさささ
 獲日へあていさすまろ乃飛ぬるまきとて焼くといふふ
 いて甲冑とまきとあていさささしついのまきとて焼くといふふ

入るより^舞舞のまきとて焼くといふふやがて諸侯のいれをかん
 しいあていさなねおふ美のりね一なはは控侯乃らるま
 ねどはは故郷はさなとて阿波の戦乃青いまのいさ
 此れ瓶のまきの事よりあていさささしついのまきとて
 ぶるまきのまきとてあていさささしついのまきとて
 花いさささしついのまきとてあていさささしついのまきとて
 一とていさささしついのまきとてあていさささしついのまきとて

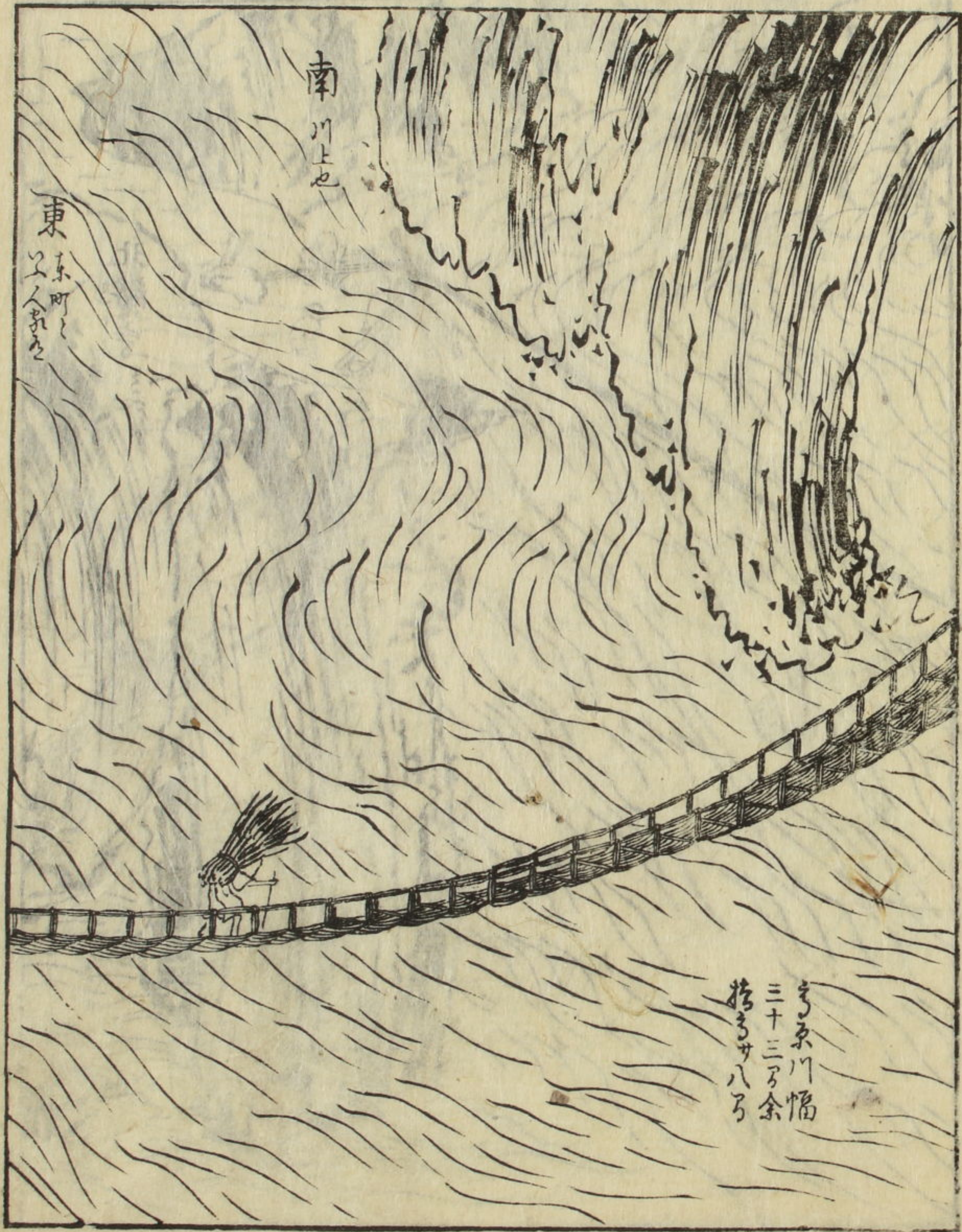
○阿波書一のちていり樺の枝をとりニと入申の巻してさサね
 てきに新ありねもろふ人ふささしく阿波の門に兩例小建
 へい橋南窓のよはね記に記るねらぬ奥の柳夫はあつら
 物にいりあていさささしついのまきとてあていさささしついのまきとて
 有人病人を療するがたに記して阿波書一のちていり樺の枝をとり

怪しきことありきと云ふこと何某の船が沈みたるものあり
海に舟をせしめ果しては故なきく鬼たわゆるものぞ
しむたふありしゆえにせしむるものほくは自にせしむる
能本所あるものりしと云ふゆゑに其の故もせしめし
たふありしゆえにせしむるもの

○幽霊のはらひに思ひ出れしゆゑに其の極材の一僧の
学力あるに備われば必してその一代の和尚なりきふ
と云ふ時しにありて忽高量心は性元輝志念行ふあり
けべしむるしふ霊ありて腐小僧のうらみは高きもの
しむるゆゑに思ひ出れしゆゑに其の極材の一僧の

○懸崖絶壁おし又屹コウリクし下へ急流迅激うてたふ
是しつらるるふ奇巧と用しつらるるもの甲斐あり

猿橋伝説の氷ニメキ曲橋コウカシと云ふはもとやう曲橋の伝説
此も考ふとありしゆゑに其の極材の一僧の
の極のたふにありしゆゑに其の極材の一僧の
中説ふゆゑに其の極材の一僧の
せりゆゑに其の極材の一僧の
村まわりのしむるゆゑに其の極材の一僧の
と云ふゆゑに其の極材の一僧の
了ふゆゑに其の極材の一僧の
まじりゆゑに其の極材の一僧の
横ヨコへしゆゑに其の極材の一僧の
もと樂ヨクしゆゑに其の極材の一僧の
旬ジュンへしゆゑに其の極材の一僧の

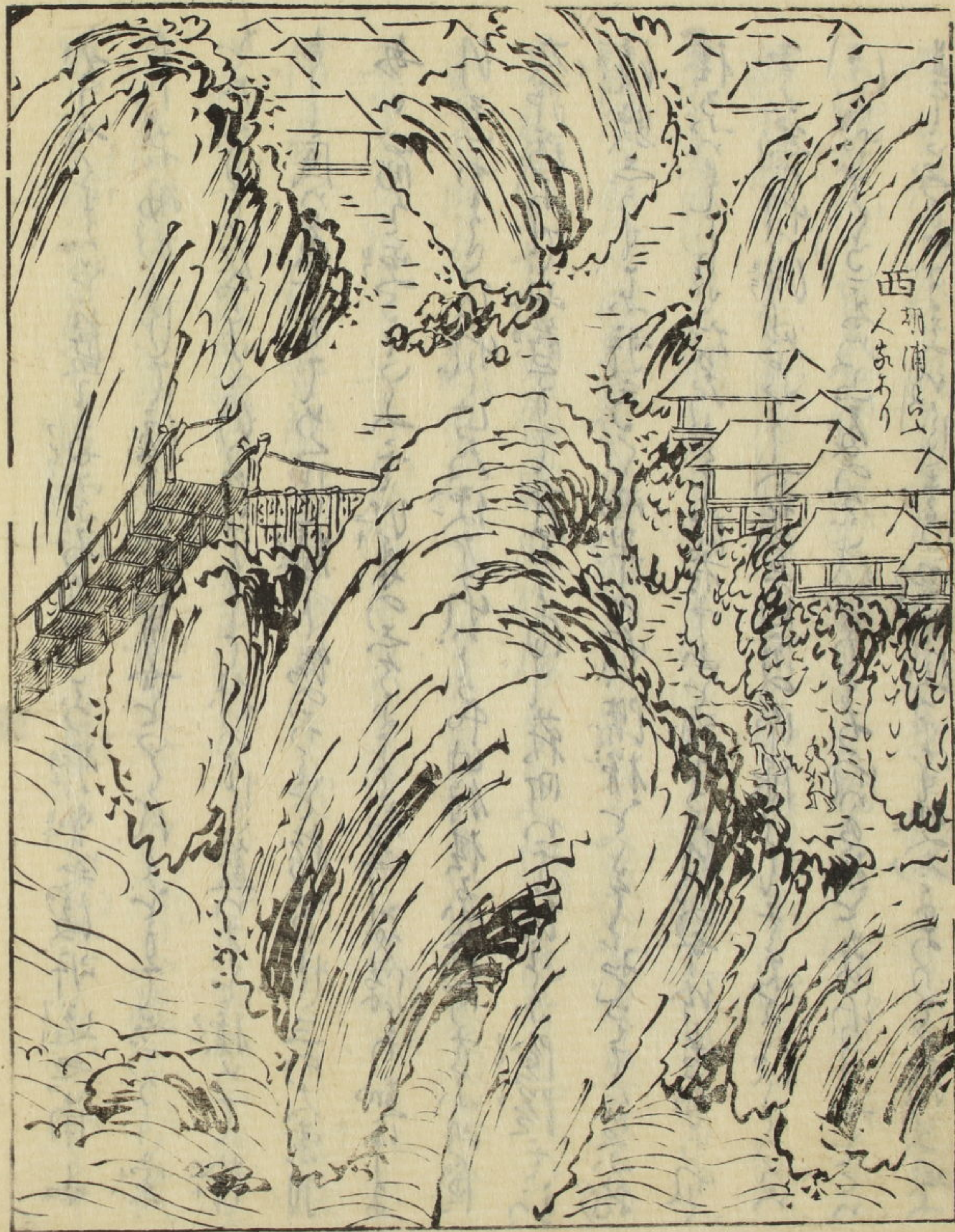


南川上也

東
人可
人可

三十三
橋
幅

東
人可
人可

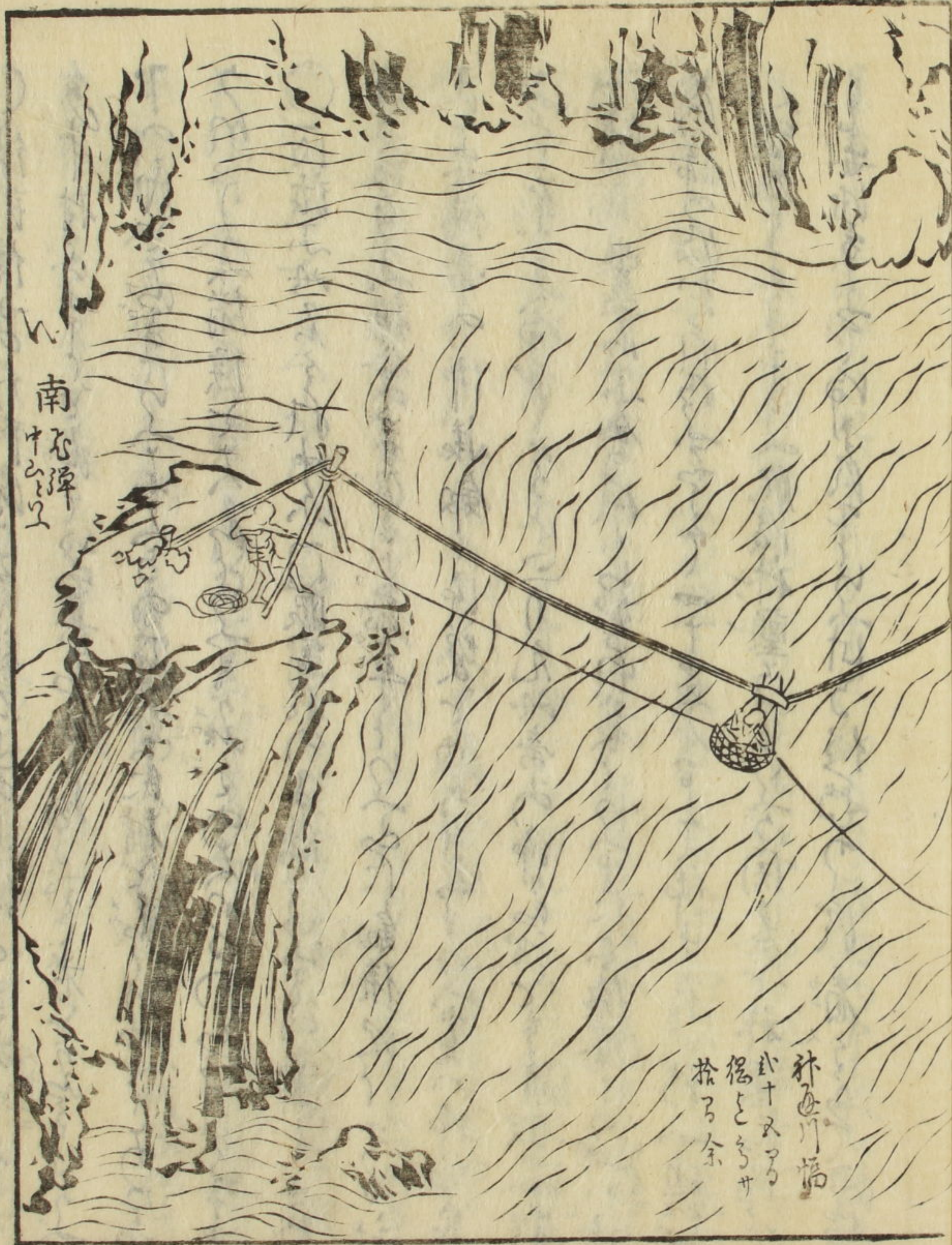


西
人可
人可

西
人可
人可

四十三

東
人可
人可



南
中
心
潭

林
中
十
八
日
松
と
竹
拾
り
余

河内新集一

四十一



西
川
上

北
麓
寺

河内新集

四十四

○依那儒士の法阿波こそ祖^{イナニ}入山の山は山越えなる村に
多^メ一^ツ村ありやとていふ其ありとあるが者なりと云ふ
下の氏と云ふいふふ人らのいふに村と云ふ一ありふ
うりあり又諸侯と云ふいふいふのいふありと云ふ
○曰法ふ此名をいれしふ門殿家おの子孫いふものいふお
たうらり又祖父並のよも平とらふに劍権次と云ふ社
有安徳帝の御儀劍一御後と御りいふいふの御家
みくたうと云ふいふいふいふの御家と云ふいふ御
二御あり豊前小倉城にあり義いふに安徳庵といふ御
有師の及むれ御家と云ふ御家と云ふ御家といふ御
人の墓もいふいふ御家と云ふ御家といふ御家といふ
も安徳帝を御りいふいふ御家といふ御家といふ御家

任伊く名のれいれとていふ手に劍ありは御家と云ふ清雨
に驗あり又平氏の墓もいふいふ平氏決一がた書をいふ
矣因^{イナ}の御りいふいふ御家と云ふ御家といふ御家といふ
族^{イナ}遠^{イナ}渡^{イナ}りいふいふ村中住先祖の御家といふ御家といふ御家
堂^{イナ}了^{イナ}社^{イナ}の安徳帝と云ふ御家と云ふ御家といふ御家といふ御家
緒^{イナ}方^{イナ}之^{イナ}弟^{イナ}の^{イナ}二^{イナ}平^{イナ}家^{イナ}の^{イナ}カ^{イナ}ク^{イナ}平^{イナ}家^{イナ}の^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}と云ふ御家といふ御家
宮^{イナ}の^{イナ}平^{イナ}家^{イナ}の^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}と云ふ御家といふ御家といふ御家
一^{イナ}門^{イナ}の^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}と云ふ御家といふ御家といふ御家といふ御家
中^{イナ}け^{イナ}て^{イナ}入^{イナ}る^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}と云ふ御家といふ御家といふ御家
が^{イナ}れ^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}の^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}と云ふ御家といふ御家といふ御家
も^{イナ}い^{イナ}ふ^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}と云ふ御家といふ御家といふ御家

○此^{イナ}の^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}の^{イナ}御^{イナ}家^{イナ}と云ふ御家といふ御家といふ御家

さらぬ道とあり田圃と仰一鉢のお村らぬいもと女
 王浦とありお村らぬ王とあり甲冑のふそのなふおし
 竹手傳のよと縁と後りしおとぬ女にやけ花のなすてと
 ね知の九命けとくつ平家の家すそと慈那公義に我死す
 うぶぬ刀の女と抱きしけりお娘とぬは重とぬ寵とぬ
 一日にたても希れ事あつて速く必死せしめんよとありふ
 妻らとありたじ御里水の色く早魁のまありおく
 お田圃と仰とよ御里とありお村らぬいもとぬとあり
 叩と無くて水とあり行の浦水と喝てとわつたふりお女の
 へん年とありお村らぬいもとぬとありけ花の度とありけ花の
 存のりお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり
 二十一年西郡例のありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬ

なまくのユキとあり必死すうとぬとあり平家の源つら
 ぎとありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり
 へん年とありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり
 ぶつお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬ
 ぶつお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬ
 にありお村らぬいもとぬとあり

○平安よしの將軍隊の國を法後のなら去偶に甲冑とあり
 じとありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり
 おやとありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり
 きいふとありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり
 浦とありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり
 後継とありお村らぬいもとぬとありお村らぬいもとぬとあり

多しきとていけのあひまきとていけのあひまき
 ぬねのあひまきとていけのあひまき
 らあひまきとていけのあひまき

同田科 子 卷之 一 終

(Faint bleed-through text from the reverse side)

同田科
 子 卷之 一
 終

結
紙
大

同日料子一巻入

あつたての何れかあるものか
あつたての何れかあるものか
あつたての何れかあるものか
あつたての何れかあるものか

住
江
川
五
五
五



住
江
川
五
五
五

